

分科会報告(二)

高校教育分科会

(一) 何を問題にするか

高校教育の分科会は、テーマが「差別・選別に於ける青年教育を考える」というものであったので、参加者七名中五名までが定時制高校の関係者であった。したがって話題の中心は、おのずから、各種の定時制教育の実態の報告にはじまり、このような教育のねらいは、何であり、そのような教育に取り組む教師はどうしなければならないか、今後のわれわれの研究および運動は、どのような方向を目指すべきなのであるか、ということであった。この小論でとりあげる問題は、最後の「今後のわれわれの研究および運動は、どのような方向を目指すべきか？」ということである。しかし、集会では、このことに関する限

り十分な時間をかけて話し合われなかった。したがって、ここでは来年の集会に向けてわれわれはどのような準備、取り組み必要なのかを、検討し、問題提起を試みることになるであろう。

まず第一に、分科会名およびテーマについて。日生連の研究・運動の歴史からいえば、この分科会で研究・討議しうる内容は、高校段階の各教科の教材研究、教科(学習)指導にウエイトがおかれるよりも、差別・選別に対抗して、青年自身が主体的に学習条件を設定し、学習を進めていくことに焦点を絞るべきである。したがって、分科会名は、「青年教育」とすることが望ましいのではないか。第二に、この分科会で主として問題にすべき領域について。同じように日生連の取り組みの経過からいえば、科学教育(主として社会科学教育)と生活指導の二つの領域に重点がおかるべきであろう、もちろん、科学

教育のねらいは、個々の事項や知識の正確な把握も必要だが、もって積極的に明確な科学観の自己形成ということに重点がおかれなければならないだろうし、生活指導も、学級、学校に領域を限定するのではなく、実生活とのかかわりを意識的に指向した内容のものでなくてはなるまい。第三に、誰を対象にした教育であるのかについて。今年度の実状をもって、今後の展望を規定することは必ずしも望ましくない。しかし、一で、分科会名を青年教育としたことは、高校の教育対象が青年期の人びとであるからという消極的な理由ではなく、定時制に通学する勤労者(少)年を、われわれの教育対象として明確に位置づけるという積極的な姿勢をとるべきだ、という決意があるからである。

(二) どのようにアプローチしていくか
高校分科会の話し合いが、始めの段階では参加者の性格から、各種の定時制高校教育の実態の検討に集中した、ということは前にふれた。そこで出た話題は、すでに日教組教研で、ここ数年来とりあげられてきたものであり、「日本の教育」「中等教育」案にかなり体系的に分析されているし、国民教育研究所からも理論的検討の成果が出版されている。

だが、それらの事実や問題性が現場の一人ひとりの教師自身のものになっていない。一人ひとりの教師が、その学校がそれぞれの地域でどのような位置を与えられ、どのような役割を担わされているのかを認識することは、その教師が自分の教科の教材研究をする以上に、ある意味では重要なものではあるまいか。なぜなら、定時制高校に通学してくる生徒は、全日制の生徒とは、生活、学習条件ともに質的に違っている。定時制教師がよくいうように、「定時制の生徒は頭が悪い、生活態度もよくない」かもしれない。しかし、それはあくまで全日制高校の生徒のソレと比較しての話であろう。これも多くの教師がいつているように、「定時制の生徒は頭が悪いのではない、彼らは大人の世界の中で、常に背のびして生活していかなければならないのだ。」彼らの生活実態、労働条件からすれば、学習意欲がなかったら、定時制に通学できるものではない。学習意欲というのは、教師が気にいるような、教師の指示に素直に従うような心的態勢をいうのではないだろう。

現在、勤労青年に、彼らのそれぞれの条件に応じた形で、教育の機会が与えられているのだろうか。むしろ現状は、企業によって一方的に規制された労働条件を前提にして、その枠内で、ただ高卒卒業の資格が取得できれば、学校教育がほんらい必要とする教育、学習条件を破壊ないし混乱させても止むをえない、という発想によって定時制教育が運営されているのではあるまいか。もしそうだとすれば、現代学校教育の重要課題の一つは、定時制高校が潜在的にもっている学習要求に、どれほど近づき、その展開にかかわることができるか、ということであるといつてよいだろう。すこし公式的でない方をすれば、定時制教育こそが、生産労働と教授・学習過程とを結合し、そこから自分を主体的な人間として自己陶冶しうる唯一の教育条件をそなえていると。高校教育というのは、もっと正確にいうならば、現代の中等教育機関は、高等教育機関の附属物でも下請機関でもない。階梯として高等教育機関の前段階をなすものではあっても、中等教育段階の教育の目的は、高等教育機関への準備教育が全てではない。単線型の歩校教育体系は、それぞれ独自の目的、機能を充分に追求し始めて意味がでてくる。そうでなければ、タテマエは単線型であってもホンネは複線型ということになるだろう。こういう状態の中の差別

と選別は、複線型でのそれ以上に矛盾であるし悲惨である。しかし、現状はマサニその通りなのである。

それゆえにこそ、われわれはただ単に、高校教育一般を問題の対象にするのではなく、定時制高校の教育問題を扱わなければならないのである。

(二) どのような

スケジュールで進めていくか
われわれは来年の集会にむけて、次のようなことをしようと思つている。

まず第一に、定時制高校教育問題のサークルをつくること。すでにある研究会、サークルと交流すること。第二に、定時制高校問題を解明する客観的な資料を蒐集分析、整理することと、一人ひとりの教師の所属する職場の実態を明らかにし、教室実践を相互に交流し合うことを平行して進めること。第三に、「生活教育」に許される限り数多く問題を提起すること。

これらの活動を通して、それが、今後の日生涯の諸活動にどのようにかかわっていくか、また生活教育が高校段階でどのように展開されなければならないかを追求していきたい。

(和光大学・山崎昌甫)